

井上神父の言葉に出会う（40）

○ 人生マラソン——折り返し地点

けれども、折り返し地点からは、老いというのは、そうしたもの（たとえば脚力、視力、聴力）をだんだんとお返ししていく過程、つまり神様からお借りしているものをお返ししてゴールに入る道のりであるということを実感させられます。（著作選集5、一〇頁）

『遺稿集「南無アツバ」の祈り』の巻頭に置かれた文章は、〈最後の講演録〉「人生マラソンを安らぎのうちに——南無アツバ」です。この遺稿のもとになったのは二〇〇六年十一月、ロゴス点字図書館主催の講演で、神父が八十歳を前にしたときの言葉です。

井上神父は歳を重ねる毎に、老いに言及することが多くなっていきました。そういうなかでこの講演原稿では、パウロにならって、人生をマラソンにたとえ、その折り返し地点（「六十五、六歳」か）からは、いままで当たり前享受してきたものを、お返しする道のりだということです。

この「人生マラソン」のうち第一に井上神父は、「折り返し」ということに注目しています。「行きは良い良い帰りは恐い」という歌の文句ではありませんが、マラソンの往路にあたる青壮年期は、意気揚々と活動できるのに対して、復路である高齢期こそが大きな問題となるのです。

この「人生折り返し」ということを聞いて、わたしがすぐ思いついた言葉は、「還暦」です。辞書によれば、「六十年で再び生まれた干支にかえることから、数え年六十一歳のこと」（大辞泉）とあります。何を隠そう、わたし自身が今まさに還暦なのです。

わたしたちが自分のものであると「当たり前」に思っていたことが、老年期に入るとどんどんできなくなる。その喪失感は、井上神父の場合、六十五歳で進行が決定的となった緑内障による失明の恐怖により切実なものとなります。

しかし神父が今こそ、人生の「折り返し地点」にいるのだ、という発想をパウロから与えられたとき、自身が抱えていた喪失感や恐怖に対する見方が変えられたのではないのでしょうか。もっともパウロにはわたしたちがアツバから出

てアッバの懷に帰る、という発想はありますが、井上神父がヒントを受けた聖書箇所『テモテへの手紙二』（おそらく四章七～八節）の、

〈わたしは、戦いを立派に戦い抜き、決められた道を走りとおし、信仰を守り抜きました。今や、義の栄冠を受けるばかりです。〉

や『コリントの信徒への手紙一』（おそらく九章二四節）の、

〈あなたは知らないのですか。競技場で走る者は皆走るけれども、賞を受けるのは一人だけです。〉

などの前後を見ても直接、人生の中での「折り返し（地点）」ということには言及していません。そういう意味では「折り返し」は、神父がパウロの「人生マラソン」という発想を敷衍したものです。

たしかにパウロにも、

〈だから、わたしたちは落胆しません。たとえわたしたちの「外なる人」は衰えていくとしても、わたしたちの「内なる人」は日々新たにされていきます。〉

（『コリントの信徒への手紙二』四章一六節）

など、老いを肯定的に捉える言辞はありますが、人生の途中に「折り返し」を置く言葉はないように思います。それはパウロの時代と現代のような長寿社会との背景のちがいゆえかもしれません。

いずれにしろ井上神父はパウロ思想を敷衍するかのよう、人生半ばの「折り返し地点」を意識することによって、わたしたちがアッバの懷に帰っていく、具体的な過程を示すことになったのではないかと思うのです。

最近、「平均寿命」が話題になるとき、「健康寿命」という言葉をよく耳にします。この背景には、医学の発達によって寿命が延びることが、無条件にいいことなのだ、という考えに対する疑問がありましよう。先日の新聞によると、平均寿命と健康寿命との差は、男女とも一〇歳位あります。つまり今後わたしたちは、二人に一人がガンになり、五人に一人が認知症になるなど、何らかの病や障害を背負いながら、一〇年は生きなければならない、ということになるのです。

○ パウロを解釈する

ここに、パウロの時代とは違った「古い」の厳しさが浮上してくるのです。しかしその解決のヒントをわたしたちが聖書に求めても、直接的な答えはないわけです。ならばどうするか。キリスト者として聖書が普遍的真理を指し示すということを知るのであれば、御言葉を現代化するしかありません。しかも同時に、真摯に実存的でなければならない。ですからそれは「非神話化」とも言えましょう。

ここで重要なことは、現代の日本人のたちにこの真理を説明するとき、二〇〇〇年前の弟子たちが使った表現を、そのまま鸚鵡のように繰り返すだけであってはならないということである。ギリシア語を日本語に翻訳しなければ、日本人には新約聖書は読めないということは、誰でもすぐにわかることである。しかし、実は表現についても全く同じことがいえるのであって、その表現をも現代日本人にわかりやすいように翻訳しなければ、決して今の人たちには理解できないのだということ、このことは決して忘れられてはならないことであろう。現代日本のキリスト教神学が、どうしてもうまれてこなければならない理由がそこにある。(『風のなかの想い』七七頁)

これも連載初期に一度引用した井上神父の言葉です(『心の琴線に触れるイエス』三五～三六頁)。古代に書かれた聖書の「表現を現代日本人にわかるように翻訳」ということ。それは「すべての日本人キリスト者の使命である」と、わたしも述べました。これは広義の意味で言えば、けっして大げさなことではありません。つまりそれは、わたしたち一人一人が日常の自然な言葉と行動で、キリスト教を表現すること、南無アツバを生きるということにほかなりません。

キリスト者としての立場から発言させてもらえば、一人一人が自分の心情でとらえたイエスの福音というものを、自分の言葉で語っていくということが、日本のキリスト教にとっては一番大切なことだと思います。(「日本の私とヨーロッパのキリスト教」『人はなぜ生きるか』六一頁)

冒頭の井上神父の「人生折り返し」という発想は、それ自体としてはオリジ

ナルなものではないでしょう。また、言葉そのものとしては、たしかに聖書にはないし、パウロ自身がそうした発想を持っていたという証拠もありません。しかし、一人の「日本人」として、かつ「キリスト者」として長く生きてきた井上神父の体験から、自然に語られた言葉であり、発想である、という点でユニークであると同時に、神父なりのパウロ解釈、パウロ「翻訳」とも言えるのではないのでしょうか。

井上神父の聖書敷衍訳や意識が優れたものであることは、本稿ですでに何度か指摘してきました。しかしここで聖書に直接的に語られていない「老い」の捉え方——「人生折り返し」発想をパウロ神学から学び取り、未曾有の高齢社会を経験しつつある日本人キリスト者として一般に敷衍し、提示するということ、それはパウロの手紙の恣意的な解釈を戒める、

〈その（パウロの）手紙には難しく理解しにくい個所があって、無学な人や心の定まらない人は、それを聖書のほかの部分と同様に曲解し、自分の滅びを招いています。〉（『ペトロの手紙二』三章一六節b）

という警告に、けっして反することではないと思います。

○ お借りしたものを返す

第二に注目したいのは、「人生マラソン」のたとえで、「折り返し地点」からは、肉体である「外なる人」の「衰え」を、「神様からお借りしているもの」を「お返しする」過程として捉えているということです。つまり、老年期はアッバから「お借りしているものをお返し」する時期だということです。

そもそも井上神父がここで例を出している「脚力」も「聴力」も、そして、こうしたことを真剣に考えるきっかけになった「視力」も、すべてわたしたち自らに発する、固有の持ち物はないのです。

〈わたしは裸で母の胎を出た。

裸でそこに帰ろう。

主は与え、主は奪う。

主の御名はほめたたえられよ。〉（『ヨブ記』一章二一節）

〈いったいあなたの持っているもので、いただかなかったものがあるでしょう

か。> (『コリントの信徒への手紙一』四章七節b)

一生懸命努力して身に着けた能力や地位、節約して貯めた財産を手放すのは、正直つらいものです。まして、肉体的に、有って当たり前と思って過ごしてきた、基本的な「脚力、聴力、視力」等々。それらが徐々に低下し、失われていくのはとても悲しいことですし、それが急速であれば、恐怖すら覚えます。

しかしそれら、自らの所有と思い込んでいたものが、実はすべて、アッパからの贈りものではなく、「お借りしていたもの」であると気づくとき、わたしたちはいずれ「お返し」するのが当然であったのだと、少しずつ納得していくのだと思います。その「納得」の度合いに応じて、わたしたちの心に安らぎが訪れてくるのではないのでしょうか。

○ 人生の意味

そして、「人生マラソン」第三のポイントは、「では何のために、わたしたちはアッパからこうした能力をお借りしていたのか？」という、「人生の意味」に対する問いに答えます。

井上神父は、『エフェソの信徒への手紙』二章一〇節を、

“私たちの人生は、神様から与えられた、私たち一人一人に神様がお望みになっていることをやっていくための神様の作品なのだ、（著作選集5、一一頁）

と敷衍しています。

『エフェソの信徒への手紙』は、通説では「第二パウロ書簡」の一つと考えられ、直接パウロの手にならない、パウロの信奉者が書いたものと言われていますが、この「人生は神の作品」という捉え方は、非常に示唆に富んだたとえであることが、井上神父の話から伝わってきます。

「作品というのは作る人が心を込める」ものですから、それが「神の作品」であれば、

神様は、私たち一人一人の人生をご自分の思いを伝えるものとして作ってくださった（同）

ということになります。

この短い言葉から、わたしたちは様々なことを学ぶことができます。

第一に、わたしたちの人生は、たとえ今どんなにつらい状況にあったとしても、根本的にアッバの祝福と悲愛の御手のなかでのことなのだ、という励ましを受けます。神が「アッバ」と呼べる方であるかぎり、その「作品」に憎しみや怒りや報復の心が込められるということは考えられないからです。

第二は、ここに「人はなぜ生きるか」——わたしたちの人生の意味・目的が、端的に表明されているということです。それは「作品」という言葉を、井上神父が強調する「場」という言葉に置き換えてみるとよくわかります。すなわち、わたしたちの人生は、それぞれが置かれた時代や境遇のなかで、「神の業」を実現していく「場」なのだということ、それこそがこの世に生を全うする意味であり、目的なのだということです。それゆえ、

(どんなに) 短い人生でも、どのような曲線を描いたような人生であっても、神様はご自分の^{わざ}業を私たちの人生でなさっている (同)

——人生は神実現の「場」のだと、断言できるのです。右の第一点で指摘したように、根本にアッバの祝福があるのですから、失敗の人生などないのです。また、気負って、何か特別なことをしようとする必要もない。何もしなくても、「存在」そのものへの祝福が先にあるからです。

その安心感、アッバのあたたかな御手のなかで、できることをすればいい。背伸びをする必要などありません。そう井上神父は言っているのだと思います。

井上神父も度々言及したV・E・フランクルの言葉から引用します。

〈生きるとはつまり、生きることの問いに正しく答える義務、生きることが各人に課す課題を果たす義務、時々刻々の要請を充たす義務を引き受けることにほかならない。〉 (『夜と霧 新版』(池田香代子訳、二〇〇二年、一三〇頁)

わたしたちが人生の意味を問うのではなくて、人生がわたしたちに意味を問うている。この「人生の意味のコペルニクス的転回」ということと、先の井上神父の言葉を合わせると、次のように考えることができます。すなわち、わたしたちの人生の主役がアッバ＝神だとすれば、わたしたちが自分の人生におい

て引き受ける「義務」とは、各人の人生において展開される「アッバの業」を行うこと、否、「アッバの業」がアッバによって行われることに協働すること、少なくともアッバが実現される業の通路となるべく、自らを持することである、と。

それは、わたしたちの人生においてはあちら＝アッバが「主」であり、こちらが「従」であるという発想——自己相対化につながります。これは追い立てられるような生活の中で、「おれが、おれが」と前に出ようと、がちがちになっている現代人への警告ともとれます。

こうして自分が相対化していったときに見えてくるものが、人生の本当の目的——その人だけに与えられた使命なのではないでしょうか。

○ 完成のとき

だから、少なくともパウロやイエスさまのお言葉によれば、死というものは決して単なる終りなのではなく、ゴールすなわち完成の時なのです。お借りしていたものを最後全部お返す、たしかに苦しく寂しい時かもしれませんが、神様の御手にお迎えいただくという意味でも明らかに完成の時なのです。（同書、――～二頁）

わたしたちの人生の主体がわたしたちではなく、アッバだとすれば、それをしめ繰る責任の主体も、またアッバということになります。わたしたちが、神様の手作りの「作品」であれば、必ず「完成の時」が来ます。それがわたしたち人間の目——神の外側に立って全体を見ることのできない目から見れば、どんなに未完成、貧弱に見えようとも、アッバから見れば、けっして失敗ということはありません。

その時にこそ、アッバからお借りしていた道具——能力をすべてお返しし、作品たるわたしたち自身をお捧げし、アッバのふところに抱き取っていただきましょう。こうしてアッバとの協働作業たる人生を閉じていくのです。

* * *

○ あの頃

二〇〇〇年ごろだったと思います。自分のホームページを作ったとき、井上神父にお願いし、たとえ私信であっても差し障りがない内容なら、アップしてもよい、という許可をいただきました。そのことを思い出しながら――

二〇〇九年にこの連載の第二部をまとめ、『すべてはアッバの御手に』というタイトルで出版しようとしたとき、その「プロローグ」に、井上神父との出会い（一九八〇～八一年にかけて）を記録しておこうと思い立ちました。個人的なことにも及ぶので、いちおう神父に了解をとった方がいいと考え、原稿を拡大コピーして送りました。

ところが、いつもならすぐにでも返事を頂けるのですが、今回はなかなか応答がありません。郵便が届いていない、ということはないだろうから、これは何か気に障ることを書いてしまったか、とだんだん不安になってきました。

そして、だいぶ経ってから次のような手紙をいただいたのです。

…たいへんに、なつかしい思いで、拝読させていただきました。

あの頃のことを思い返すと、やはり感無量の思いで、アッバのなさることの不思議さにしみじみと打たれる思いがいたします。

あの輪読会は、カトリック新聞に広告をだしてはじめたものでした。当時私は、すでに朝日カルチャーセンターで「キリスト教入門講座」をはじめており、三十人以上の未信者の方々が、ききに來てくださっていました。

また、七六年に出版した『日本とイエスの顔』の反響も相当に大きく、たくさんの手紙をいただいていた。ただ、カトリックの信者さんたちの反応は殆どゼロに等しいものだったのですが……。

今になって振り返ってみれば、「風の家運動」をはじめて二十年以上がたちましたが、その間、朝日や日経などの新聞はとても好意的に紹介してくださり、毎日、読売なども多々ふれてくださっていたのですが、……。

それで輪読会に、たった四、五人しかあらわれなかったのをみたとき、正直言って、心では私は大きなショックを受けていたのです。

あのときの人たちで、いまもおつきあいさせて頂いているのは、実に、平田

さん、あなたお一人だけですものね。

ま、いろいろなことがありました。すべてはアッバが、私たち作品をとおし
て、おこなっておられることなのですよ。……

アッバ アッバ 南無アッバ

二〇〇九年二月八日

井上洋治

平田栄一様

便箋七枚に渡る、この長い手紙を受け取ってすぐ、お礼の電話をかけたとき、
右にあるように「あの頃のことを懐かしんで、しばらく思い出していたんだよ」
と書いていました。

わたし自身も「感無量」なのは当然ですが、井上神父にとっては、まさかあ
のときの「たった四、五人」のうち一人の若者が今のわたしであった、とい
う意外感？が強いのだと思います。そして、同時進行していたカルチャーセン
ターでの反響と、身内の教会での鈍い反応とのギャップ。それはカトリック司
祭であってみれば、やはり「大きなショック」だったのだなあ、と改めて確認
したのでした。神父もわたしも共に、「アッバのなさることの不思議さにしみじ
みと打たれる思い」がしたのです。

そしてこの手紙も、

くま、いろいろなことがありました。すべてはアッバが、私たち作品をとおし
て、おこなっておられることなのですよ。>

と結ばれています。この七年前の手紙を今読み返しながら、アッバの「作品」
としてのわたしたちの人生は、「南無アッバ」ととなえ、お任せするところに実
現していく、そう身をもって、井上神父がわたしたちに教えてくれたことに、
あらためて感謝しています。(つづく)